

琉球大学学術リポジトリ

沖縄方言のとりたてのくつつきとかかりむすび：
今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい（おぼ
えがき）

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, 島袋, 幸子, Karimata, Shigehisa, Shimabukuro, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/553

沖縄方言のとりたてのくつつきとかかりむすび — 今帰仁謝名方言と具志川安慶名方言のばあい（おぼえがき） —

かりまた しげひさ・島袋 幸子¹⁾

1. はじめに

今帰仁村謝名方言とうるま市安慶名方言²⁾の両者に共通に存在するとりたてのくつつき (=係助辞) には=ja (は)、=N(も)、=du(ぞ)、=ga(か)、=bike:(だけ)³⁾、=t3UN(さえ)⁴⁾、=madi(まで) などがある⁵⁾。また、謝名方言にはとりたてのくつつき として=kuse: がある。=kuse: は、今帰仁方言にはみられるが、沖縄中南部諸方言にはみられないものである⁶⁾。

とりたてのくつつき =du のついた「du のとりたて形」は、終止の位置にあらわれる特定の専用形式と呼応することがしられている。先行する特定の形式に呼応して後続の文法形式が特定の形式であらわれる現象を「かかりむすび」といい、古代日本語においてとりたてのくつつき「ぞ、なん、や、か」のついたとりたての形に呼応して「連体形」があらわれ、「こそ」のとりたての形に呼応して「已然形」があらわれる かかりむすび がよくしられている。しかし、現代日本語ではとりたてのくつつき「こそ」をのこすが、他のとりたての形は失われた。「こそ」も已然形でむすばなくなり、かかりむすびが失われている。沖縄諸方言（謝名方言、安慶名方言をふくむ）では du のとりたて形に呼応してドウむすび形⁷⁾ があらわれるかかりむすびの現象がみられ、現在でもさかんに使用されている。さらに沖縄諸方言では ga のとりたて形に呼応して ra 推量形があらわれるし、今帰仁方言（謝名方言をふくむ）では kuse: のとりたて形に呼応して ra 推量形があらわれる。先行する特定の形式、すなわち、特定のとりたての形に呼応して、後続の文法形式、すなわち、いいおわりの述語になる活用語が特定の形式であらわれる現象を「かかりむすび」と規定するなら、とりたてのくつつき =ga、=kuse: に ra 推量形が呼応することも「かかりむすび」とみることができるかもしれない。

鈴木重幸 (1972) は、標準語の「とりたて」をつぎのようにのべている。

名詞は格によって文のなかの他の単語に対することがら上の関係（素材＝関係的な意味）をあらわすが、名詞の格、とくに連用的な格は、とりたての形が分化していて、そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわける。（中略）とりたての形は、主題の提示や文の部分の強調などの機能をもはたす。

謝名方言、安慶名方言の とりたての形も「そこに表現されているものごとが現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわける」機能と、「主題の提示や文の部分の強調」をあらわす機能をもっていて、さしあたっては鈴木（1972）の規定にもとづいて記述をすすめる。

謝名方言、安慶名方言の とりたてのくつつきは、主語、補語、状況語、述語などの文の部分に後接し、その とりたてのくつつきのついた文の部分をととりたてる。たとえば、=du は、それがついた文の部分で指定して強調する。=ga は、疑わしさをあらわす文に使用されて、話し手が疑わしいと感じている文の部分につく。=kuse: は、おしはかり文に使用されて、おしはかられる文の部分で指示する。

主語、補語、状況語などの文の部分をととりたてるとき、名詞をととりたての形にするのだが、名詞の格の形（名詞に格のくつつき＝格助辞をつけた形）のさらにうしろにとりたてのくつつきをつける⁸⁾。

- 1) ⁴?atʒa: ʔisanu ja:~kat'i ʔitʒun.
 (明日 医者の家(病院)に いく。)
- 2) ⁴?atʒa: ʔisanu ja:~kati=du ʔitʒuru.
 (明日 医者の家(病院)に いくんだよ。)
- 3) ⁴tara:ga tʒira:nu ʔak'ase:ʒiga. ʔarija sak'i=ga nuduira.
 (太郎の 顔が 赤いんだが。 あいつは 酒を 飲んでいるのか。)

- 4) ⁴nengad3o:ja p'upp'u: -ga=kuse: hattzara.
 (年賀状は 祖父は 書いたのだろう。)

謝名方言の格=とりたての形を表にしめす。

	指定の ⁹⁾ とりたて	-ja ¹⁰⁾	-N	-du	-ga	-kuse:
はだか格	—	-ja	-N	-du	-ga	-kuse:
-ga	-ga	-gaja ¹¹⁾	-gan	-gadu	-gaga	-gakuse:
-nu	-nu	-nuja	-nun	-nudu	-nuga	-nukuse:
-nkai	-nkai	-nkaija	-nkain	-nkaidu	-nkaiga	-nkaikuse:
-tzi	-tzi	-tziya	-tzin	-tzidu	-tziga	-tzikuse:
-kara	-kara	-karaja	-karan	-karadu	-karaga	-karakuse:
-madi	-madi	-madija	-madin	-madidu	-madiga	-madikuse:
-tu	-tu	-tuja	-tun	-tudu	-tuga	-tukuse:

述語になる動詞をとりたてるとき、完成相をあらわす肯定の動詞のばあい¹²⁾、第一中止形に とりたてのくつつき をつけ、さらに補助動詞 sun をくみあわせた分析的な形 (analytical form) にする¹³⁾。いいおわりの述語を =du でとりたてるとき、補助動詞は suru (ドゥむすび形) になり、=ga、=kuse: でとりたてるときは sura (ra推量) になる。

- 5) ⁴?isa-nu ja:kat'i ?itzi=du suru.

(医者の 家(病院)に いくんだよ。)

?itzi_{SUN}(行く)のduのとりたての形

- 6) ⁴?ari-N numi=ga fitzara.

(あいつも 飲んだのだろうか。)

nudan (飲んだ) の ga のとりたての形

- 7) ⁴p'upp'u:ja nengad3o: hatzi=ja su:figa, duttzija ?idzasan.

(祖父は 年賀状を 書きは するが、自分では 出さない。)

hatzu:figa (書くが) の ja のとりたて形

述語になる否定の動詞をとりたてるとばあい、第一中止形(直説法断定の形と同音形式)にとりたてのくつつきをつけ、さらに補助動詞 ?aN をくみあわせた分析的な形にする。いいおわりの述語を=du でとりたてるとき、補助動詞は ?airu (ドウむすび形)になり、=ga、=kuse: であれば ?ara (ra 推量)になる。

8) ⁴?ari-ja kusui numan=du ?airu.

(あいつは 薬を 飲まないのだ。)

numan (飲まない) の du のとりたての形

9) ⁴ʃiguto: ne:n=ga ?ara. me:natʃi ?aʃido:n.

(仕事は ないのだろうか。毎日 遊んでいる。)

ne:n (ない) の ga のとりたて形¹⁰

10) ⁴nama pe:se:t'e:t'u, ninban=ga ?ait'ara.

(まだ 早かったので、寝なかったのだろうか。)

ninbantān (寝なかつた) の ga のとりたて形

述語になる肯定の形容詞をとりたての形にすると、形容詞 sa 連用形にとりたてのくつつきをつけ、さらに補助動詞 ?aN をくみあわせた分析的な形にする。

11) ⁴nu:ditʃi k'a:t'aga? ja:sat'i:?

(どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか?)

ja:sat'aN (お腹がすいた) の肯否たずね形

12) ⁴nurditʃi k'a:t'aga? ja:sa=du ?ait'i:?

(どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか?)

ja:sat'i: (お腹がすいたか) の du のとりたて形

述語になる否定の形容詞をとりたてるとき、謝名方言のばあい、形容詞の ku 連用形 (sa 連用形も可能)にとりたてのくつつきをつけ、さらに補助動詞 nen (無い) をくみあわせた分析的な形にする。

- 13) ^ʔat'arase:tu=du k'a:t'aru. ja:sa=ja nent'ando.
 (もったいないから、食べたんだ。腹は空いていなかったよ。)

安慶名方言のばあい、形容詞の ku 連用形にとりたてのくつつきをつけ、さらに補助動詞 ?an をくみあわせた分析的な形にする。否定の形容詞をとりにたてるとき、補助動詞 ne:N をくみあわせるのは謝名方言と同じ。

- 14) ^ʔma:ko: ne:nta:figa, ?atarasa=ga ?atara.
 (おいしくは なかったが、もったいなかったのだろうか。)
 ?atarasatan (もったいなかった) の =ga のとりたての形。

- 15) ^ʔatarasatakutudu kataru. ma:ko: ne:ntando:.
 (もったいないから、食べたんだ。おいしくは なかったよ。)

述語になる名詞をとりにたての形にするばあい、名詞にとりたてのくつつきをつけ、むすび(繫詞)の jeN (である) をくみあわせてつくる。

- 16) ^ʔanu tzu:ja gakk'o:nu sinji: je:t'an.
 (あの人は学校の 先生 だった。)
- 17) ^ʔanu tzu:ja gakk'o:nu sinji:=du je:t'aru.
 (あの人は学校の 先生 だったんだ。)
- 18) ^ʔanu tzu:ja gakk'o:nu sinji:=ga je:t'ara.
 (あの人は学校の 先生 だったのだろうか。)

とりたてのくつつき =ga について国立国語研究所 (1963) ではつぎのように述べられている。

疑わしさを表わす文に用いて、文の疑わしい部分に付く。あとを推量の形 (a で終わる) で結ぶ。

鈴木重幸 (1962) は、国立国語研究所 (1963) の「推量の形」を「うたがいがい法」とよび、つぎのように記述している。

ことがらを断定できない、うたがわしいものとして述べる活用形である。この形は助詞 (あるいは接尾辞) -ga (うたがわしい部分につける) と呼応して用いられるのが普通である。

仲宗根政善 (1983) には今帰仁方言のとりたてのくつつき=kuse: がつぎのように述べられている。

強く指示して強調する意をあらわす。こそ……であろう、の意。活用語の「か」の結び⑬で結ぶ。例アリーガクセー いジャーラ (彼こそ行ったにちがいない)、フリクセー エーラー (これにちがいない)。

かりまた・島袋 (2006) では、du のとりたての形と呼応する形式をドゥむすび形、ga のとりたて形と呼応する形式を念おしたずね形、kuse: のとりたて形と呼応する形式を kuse: 推量形と名づけた。かかりむすびの現象を重視してのものであった。しかし、念おしたずね形と kuse: 推量形は同音形式であり、意味的に連続し、両者は関連する。国研 (1963) の「推量の形」にならって、本稿では念おしたずね形と kuse: 推量形を「ra 推量形」にあらためることにする。後述するように、特定の条件のもとで ra 推量形を述語にもつおしはかり文が念おしたずねをあらわす文に移行するのである。奥田靖雄 (1984) は、現代日本語の「だろう」を述語にもつ文が「おしはかり」から「念おし」へと移行することを指摘しているのだが¹⁹⁾、安慶名方言や謝名方言でも念おしたずね形と kuse: 推量形の相関関係は明らかである。

19) ⁴ku:nu ju:banja p'app'a:ga=du suk'o:ruru.
(今日の 夕食は 祖母ちゃんが 作るんだ。)

20) ⁴?arija sak'i:=ga nudara. t3iranu ?ak'ase:figa.
(あいつは 酒を 飲んだのか。 顔が 赤いんだが。)

- 21) 'p'upp'u:ja nengadzo:=kuse: hatzura.
 (祖父は 年賀状 書くだろう。)

以下に謝名方言の動作動詞の普通体・肯定の完成相の終止形のパラダイムをかかげる。後述するように謝名方言には「du むすびたずね」の形がないが、安慶名方言には du むすびたずねがあるので、安慶名方言の語形をカッコに入れてかかげておく。

ムード		テンス		非過去	第1過去	第2過去
		断定	推量			
直説法	一般むすび	hat3-un	hatt3-an	hat3-u:tan		
	du むすび	hat3-uru	hatt3-aru	hat3-u:taru		
	padzi 推量	hat3-ura padzi	hatt3-ara padzi	hat3-u:tara padzi		
	ra 推量	hat3-ura	hatt3-ara	————		
質問法	肯否たずね	hat3-umi	hatt3-i:	hat3-u:t'i:		
	du むすびたずね	(katʃ-urui)	(katʃ-arui)	(katʃ-utarui)		
	疑問詞たずね	hat3-uga	hatt3-aga	hat3-u:taga		
	命令	hak'-i, hak'-e:, hak'-iba				
	勧誘	hak'-a:				

du, ga, kuse: のとりたて形の文法的な意味をあきらかにすることは、それらと呼応する文法形式の「ドウむすび形」「ra 推量」「ドウむすびたずね形」についてあきらかにすることにつながる。逆に、「ドウむすび形」「ra 推量」などの文法的な意味をあきらかにすることなしに、du, ga, kuse: のとりたて形をあきらかにできないだろう。そして、「ドウむすび形」「ra 推量」「ドウむすびたずね形」などの文法的な意味をあきらかにすることは、それらとともに活用形の体系をなす他の形態論的な形式をあきらかにすることにつながるであろう¹⁶⁾。

本稿では、今帰仁村謝名方言、うるま市安慶名方言のとりたて形について、とくに du, ga, kuse: のとりたて形に関して、それがあらわす文法的な意味、そして、かかりむすびがどのように現象しているかを検討しつつ、それらとりたて形と呼応する文法形式についても検討する¹⁷⁾。

2. とりたてのくつつき =du

du のとりたて形は、ものがたり文 narrative sentence で使用されるだけでなく、たずねる文 interrogative sentence のなかでも使用される¹⁰⁾。ものがたり文のばあい、いいきりの文でもおしはかりの文でも使用される。たずねる文のばあい、肯否たずね文では使用されるが、疑問詞たずね文では使用されないという制約がある。

文の部分に =du をつけ、そのあらわすことがらをとりたてるとき、文の終止の位置にあらわれる述語形式がドゥむすび形になることが知られている。いっぽうで、du をともないながら、いいおわりの述語がドゥむすび形にならないことを国研 (1963) は以下のようにふれている。

強意の助詞で、ふつうあとを連体形で結ぶが例文に見るようにそうでない例もある。niizamundu jasiga, maakumaaku kanagiisa. まずいものなのにおいしそうに食べてるよ。sirihwicimeehwici Qsi, ?umuinudu ?aeesani. 身辺をうろろうして、気でもあるのだろうか。

国研 (1963) は、いいおわりの述語がドゥむすび形にならないことの原因をとくにふれていないが、例文のひとつはあわせ文のつきそい文に du のとりたて形をふくむもので、もうひとつは、うちけしのたずねる文の例である。文の通達的なタイプのちがいによって du のとりたて形がかかりむすびをしなことが推察できる。

du のとりたて形は、いいおわりの述語をドゥむすび形にさせるのだが、ドゥむすび形は直説法いいきり (断定) の形であり、たずねる文の専用形式を有する安慶名方言、謝名方言のドゥむすび形は、ものがたり文にしかあらわれない述語形式である。du のとりたて形は、たずねる文やおしはかり文のなかでどのように機能し、そこでの述語形式はどうなっていて、かかりむすびはどうなっているのだろうか。

以下にのべるように du のとりたて形があっても、述語の形式がドゥむすび形でないばあいもあって¹⁰⁾、そこを糸口に安慶名方言、謝名方言における =du

の機能、および、かかりむすびとはなにかということをかながえる²⁰⁾。

2.1.=du と ものがたり文

安慶名方言、謝名方言ともに ものがたり文の主語、補語、状況語などが du のとりたて形になり、いいおわりの述語をドゥむすび形にすると、du のとりたて形がさしめすことがらをとりたてる いいきり文になる²¹⁾。

- 22) ⁴?antzi nitzi: ?ainumunnu, figut'u su:nu tzu:nu 'unna:.
(そんなに 熱が あるのに、 仕事を する やつが いるか。)
?isanu ja:-kat'i=du ?itzuru.
(医者の 家 (病院) に いくんだよ。)
- 23) ⁴'kusui nude:t'u=du maʃi natt'aru. joi nint'uta:nu
(薬を 飲んだから、よく なったんだ。ただ 寝ていた
ba:ja ?arando:.
わけでは ないよ。)
- 24) ⁴'nengadzo:ja ta:-ga hatzuga. ?ja:-ga=du hatzunna:?
(年賀状は 誰が 書く? おまえが 書くの?)
tʒattʒa:-ga=du hatzuru. wa:gaja hak'ando:.
(父が 書くのだ。私は 書かないよ。)
- 25) ⁴?unu tigamija kinu:=du hattzaru.
(その 手紙は 昨日 書いた。)
- 26) ⁴'tigamija p'app'ai:-ga=du hatzu:t'aru.
(手紙は 祖母が 書キヨッタ。)
- 27) ⁴'gakk'o:nu kut'uja ʃinʃi:-ga=du waha:ru. watt'a:gaja
(学校の ことは 先生が 分かるんだ。私たちには
waha:ru.
わからない。)
- 28) ⁴'ku:nu ju:banja p'app'ai:-ga=du suk'o:ruru. watt'a:gaja
(今日の 夕食は 祖母が 作るんだ。私たちは

suk'o:ranu.

作らないよ。)

- 29) ^uwanja midzi=du nudaru. sak'ija numant'ando:.
(私は 水を 飲んだんだ。 酒は 飲まなかったよ。)
- 30) ^ufit'irunditzi ?utzet'arumunnu nu:ditzi k'a:t'aga?
(捨てようと 置いてあったのに どうして 食べたんだ?
ja:sa=du ?ait'i:
腹が空いて いたのか。)
?at'araset'u=du k'a:t'aru. ja:saja nent'ando.
(もったいないから、 食べたんだ。 腹は空いていなかったよ。)

一般むすび形には終助辞 =do:, =ja:, =te:, =na:²²⁾ などがついて、モーダルな意味をつけくわえる。ドウむすび形が述語になる文(強調文)のばあい、これらの終助辞はつかず、ドウむすび形でいいきる²³⁾。

- 31) ^u?ja: nu: numiga?
(君、何を のんでいるか?)
wanna: tʃa: numinjo:.
(私か。 お茶を のんでいるよ。)
- 32) ^u?ja: ?mant'i nu: su:ga?
(君は ここで 何を している?)
wanna: mja:nu kusa: hanjo:.
(私か。 庭の 草を 刈っている。)
- 33) ^umi:mi:ja nu: su:ga?
(兄さんは 何を している?)
pukant'i ?afibin=do:.
(外で 遊んでいるよ。)
- 34) ^u?afi: k'a:t'ina:?
(お昼、食べた?)

ʔin, k'a:t'an=do:

(うん、たべたよ。)

ドウむすび形をいいおわりの述語にする文が終助辞をとまなわないのは、ドウむすび形がそれだけでモーダルな意味の実現に関与しているからであろう。終助辞をとまなわない一般むすび形を述語にもつ文と比較検討するだけでなく、終助辞を述語にもつさまざまな文のセンテンスタイプとの対立のなかにドウむすび形を述語にもつ文を位置づけて検討することが必要になるだろう。

2.2.=duと おしはかり文

謝名方言のばあい、話し手の想像や思考といった間接的な認識をあらわすおしはかり文の述語形式として padzi 推量形と ra 推量形があり、安慶名方言には hadzi 推量形と ra 推量形がある。

謝名方言では padzi 推量形を述語にもつ おしはかり文の部分を du のとりたて形にし、その文の部分をとりたてることができる。いっぽう、ra 推量形を述語にもつ文がその文の部分を kuse: のとりたての形にすることはできるが、du のとりたて形にすることはできない。

形式名詞 padzi (安慶名方言では hadzi) のついた padzi 推量形は、形のうえでは標準語の「するはずだ」に対応する。padzi 推量形は、標準語「するはずだ」と同じく確かな根拠をもとにおこなう「当然」の判断から、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をもとにした想像あるいは思考による推量の意味へ、そして、十分に確認されていない根拠による推量の意味にずれている²¹⁾。

35) ⁴ʔatza:ja siŋsi:n numira padzido:

(明日は 先生も 飲むだろうよ。)

36) ⁴kinu:n nudara padzi.

(昨日も 飲んだだろう。)

37) ⁴tara:ja ʔmant'i nu: tzi:ga?

(太郎は そこで 何を 切りつつあるの?)

ʔju:=du tzi:ra padzido:.

(魚を 切りつつあるだろう。)

38) ^ʔtitt'a: warabi:ja nu: tʒittʒut'aga?

(お宅の子は 何を 切っていた?)

dak'i:=du tʒittʒutara padʒi.

(竹を 切っていただろう。)

du のとりたて形をもつおしはかり文は、du のとりたて形にさしだされるものごとがとりたてられている。おかれた状況のなかで du のとりたて形によってさしだされる動作の主体や客体、時間や空間などがとりたてられておしはかられているのだろう。

du のとりたて形をもたないおしはかり文 (35) 36) の例) の述語も du のとりたての形をもつおしはかり文の (37) 38) の例) の述語もおなじになるので、このばあい、かかりむすびはみられない。しかし、padʒi 推量形を述語にもつとき、むすび (繫詞) の jen (だ、である) をしたがえ、むすびをドウむすび形にすることができる。むすびの jen (安慶名方言 jan) をしたがえた文の検討がのこされている。

2.3.=duと たずねる文

たずねる文は、話し手が自分の知らないことについて情報をもとめて聞き手にたずねたり、確認をもとめたりする文である。安慶名方言にも謝名方言にも肯否たずね文と疑問詞たずね文があり、それぞれのたずねる文の述語になる専用形式が存在する。肯否たずね形は肯否たずね文の専用形式であり²⁶⁾、疑問詞たずね形は疑問詞たずね文の専用形式である²⁶⁾。

2.4.=duと 肯否たずね文

安慶名方言も謝名方言も、肯否たずね文の特定の文の部分で du のとりたて形にすることができる。そのばあい、話し手が知りたいとおもって聞き手にたずねるのは、出来事全体ではなく、出来事を構成しているものごとについて、

いくつかある可能性の中からひとつをとりたて、それをあらわす文の部分を du のとりたて形にして話し手の仮の判断をさしだし、聞き手にその真偽をたずねるのである。

安慶名方言のばあい、du のとりたて形と呼応して du むすびたずね形があらわれる。du むすびたずね形は、du むすび形に質問の意の接辞-i をつけたものである²⁷⁾。

- 39) ⁴?anu kanbano: ?ja:-ga=ru katjarui?
 (あの 看板は 君が 書いたのか?)
- 40) ⁴na:da mi:sarumunnu. jugurito:gutu=du Jiti:rui?
 (まだ 新しいのに。 汚れているから 捨てるのか?)
- 41) ⁴harufiguto: ta:ga saga? ?ja:-ga=ru sarui?
 (畑仕事は 誰が した? おまえが したの?)
- 42) ⁴watta: kkwaja gakkoi:-nkai=du ?nd3o:rui?
 (うちの 子は 学校に いるのか?)
- 43) ⁴na:da he:sarumunnu, ?i:na nindzi:=du surui?
 (まだ 早いのに、 もう 寝るのか?)

いっぽう、謝名方言のばあい、du むすびたずね形をもたないが、du のとりたての形をもった肯否たずね文をつくることができる。

- 44) ⁴?ja: tigami=du hat3unna:?
 (君、手紙を 書いているのか?)
 何か書いているようだが、確認できない。書いている人に何を書いているのか、手紙を書いているのかをたずねる。
- 45) ⁴?ami=du punna:?
 (雨が 降っているのか?)
 雨が降っているようだが、部屋にいて直接確認できず、そとにいる人に質問する。

- 46) ^hnu:ditʒi k'a:t'aga? ja:sa=du ʔait'i:
 (どうして 食べたんだ? 腹が空いていたのか。)
 ʔat'arase:t'u=du k'a:t'aru. ja:saja nent'ando.
 (もったいないから、食べたんだ。腹は空いていなかったよ。)
- 47) ^hgink'o:nu ʃatt'a:-ga=du ʔatʒumi?
 (銀行の シャッターが 開きつつあるの?)
- 48) ^hʔana:=du puɳna:
 (穴を 掘っているの?)
- 49) ^hʔja: sak'i=du numinna:
 (君、酒を のんでいるの?)
 ʔin, sak'i: numin.
 (うん、酒を のんでいる。)
- 50) ^hʔja:-ga=du ʔanu kanbanja hattʒi:
 (君が あの 看板を 書いたのか?)

安慶名方言の肯否たずね文も、謝名方言と同様、duのとりたての形があっても、いいおわりの述語を必ずしもduむすびたずね形にしなくてもいいばあいがある。そのばあいでも、いくつかある可能性の中のひとつをduのとりたての形にしてとりたて、話し手の仮の判断としてさしだして、聞き手に確認してたずねる。ドウむすびたずね形を述語にもつたずね文においても、ドウむすびたずね形をもたないたずね文においても、duのとりたて形によってさしだされるものごとをとりたてるといってはたつきはわからない、といってよさそうである。

2.5.=duと 疑問詞たずね文

話し手が自分の知らないことについて情報をもとめて聞き手にたずねるとき、その出来事全体ではなく、疑問詞を文中にさしこんで、動作の主体、あるいは客体をたずねたり、出来事がいつ、どこでおきたのか、なぜそうなったのかをたずねたりする。謝名方言でも安慶名方言でも疑問詞たずね文にduのとりた

て形はあらわれない。疑問詞たずね文のばあい、疑問詞でさしだされる部分が焦点化されるので、du のとりたて形にする必要がないのであろう。

51) ^jhoimunja taruga ?itʒuga?

(買い物は 誰が 行く?)

tara:ga ?itʒun.

(太郎が 行く。)

52) ^j?ja: nu: numiga?

(君、 何を のんでいる?)

wanna: tʃa: numinjo:.

(私か。 お茶を のんでいるよ。)

53) ^jnu: mudaga?

(何を 飲んだ?)

sak'i nudan.

(酒を 飲んだ。)

54) ^jp'upp'u:ja da:ni 'uit'aga?

(祖父は どこに いた?)

55) ^jwanja nu: numi:t'aga?

(私は 何を 飲ミヨッタ?)

?ja:ja bi:ru numi:t'an.

(君は ビールを 飲ミヨッタ。)

疑問詞たずね文の述語の疑問詞たずね形に終助辞 =ja: をつけると、かならずしも聞き手の答えをもとめず、話し手のわからないこと、すなわち、出来事がある、どこでおこったのか、動作の主体や客体がだれなのか何なのか、なぜそうなったのか、疑問におもうことがさしだされる文になる。疑問詞たずね形が述語に使用されているが、聞き手をかならずしも必要とせず、聞き手がいなくても聞き手にこたえを要求しないということで本来のたずねる文ではない。しかし、さしだされた疑問について聞き手から答えがかえってくることもある。

- 56) ⁴hoimunja taruga ?it3uga=ja:.
 (買い物は 誰が 行くのかな。)
- 57) ⁴ʃinʃi:ja nu: numiga=ja: tʃa:du numiga=ja: ko:hi:du
 (先生は 何を 飲むのかなあ。お茶を 飲むのかなあ。コーヒーを
 numiga=ja: .
飲むのかなあ。)
- 58) ⁴ʔarija nu:di ?it3aga=ja: ju: ʃik'arant'an.
 (あいつは 何と 言ったのかな。よく 聞こえなかった。)
- 59) ⁴p'upp'u:ja ?itzi ?it3uga=ja:.
 (祖父は いつ 行くのかな。)

疑問詞たずね形に終助辞 =ja: のついた形式がいいおわりの述語になっているにもかかわらず、疑問詞をふくまない文がある。この文は、話し手がうたがわしいと感じた出来事について、いくつかある可能性のうちの、話し手が想定した出来事について疑問のかたちでなげだしている。かならずしも聞き手の存在を前提にしない。

- 60) ⁴?na: gakk'o:rtzi ?id3agaja:.
 (もう 学校に 行ったかなあ。)
- 61) ⁴watt'a: k'wa:n benk'jo: ʃit3uigaja:.
 (うちの 子も 勉強 しているかなあ。)
- 62) ⁴ʔari:ja hoimun ʃi:ga ?id3a:ʃiga, dʒinija muttzi
 (あいつは 買い物を しに 行ったが、金は 持って
?id3agaja:.
いったかなあ。)

疑問詞たずね形が述語として使用されているにもかかわらず、疑問詞が文中に存在せず、特定の文の部分を du のとりたて形にし、うたがわしいと思われ

ることがらを焦点化させたうたがいたずね文がある。ここには du のとりたて形によってとりたてられてはいるが、ドウむすび形との呼応はみられない。

- 63) ⁴?asara mi:ranfiga, gakk'o:-tzi=du ?idzuiɡaja:.
 (朝から 見えないが、 学校に 行っているのかなあ。)
- 64) ⁴ta:ge:ra benk'jo: ʃitʒuiʃiga, watt'a: k'wa:-ga=du benk'jo:
 (誰か 勉強 しているが、うちの 子が 勉強
ʃitʒuiɡaja:
しているのかなあ。)
- 65) ⁴?aie:na:, warit'uisa: p'upp'u:-ga=du ?ut'utʒe:ɡaja:.
 (ああ、 割れているぞ。 祖父が 落としたのかなあ。)
- 66) ⁴nu:ge:ra ?aiʃiga, ?iʃi:-nu=du ?aiɡaja:.
 (何か あるが、 石が あるのかなあ。)

安慶名方言でも謝名方言でも、ものがたり文のいいきり文は du のとりたて形とドウむすび形が呼応しているが、おしはかりの文では、du のとりたて形と述語とのあいだに特別な呼応はみられない。また、肯否たずね文において、安慶名方言のいいきりの文では du のとりたて形とドウむすびたずね形が呼応するが、謝名方言では du のとりたて形と述語とのあいだに特別な呼応はみられない。疑問詞たずね文においては、両方言ともに du のとりたて形そのものがあらわれない。疑問詞むすび形を述語にもつうたがいたずね文の文の部分で du のとりたて形にしてとりたててすることはできるが、述語はドウむすび形でもドウむすびたずね形でもなく、疑問詞たずね形に終助辞=ja: をつけたものである。

ドウむすび形、ドウむすびたずね形のような特定の形式と呼応しているにせよ呼応していないにせよ、du のとりたて形がさしだすことがらをとりたてるというとりたての機能は、十分に果たしている。いいきりのものがたり文と肯否たずね文という限定された条件のなかで特定の述語形式と「かかりむすび」の関係をもすんでいるといえるのだが、そのばあいのかかりむすびをどうとら

え、モダリティーの表現にどう位置づけるべきなのか、まだ解決できていない。

3. とりたてのくつき =ga

文の部分が ga のとりたての形になるとき、いいおわりの述語が ra 推量形でむすばれることがしられている。ra 推量形が ga のとりたての形に呼応してあらわれ、かかりむすび的な現象をみせる。鈴木 (1962) は、ra 推量形のもつ文法的な意味を「うたがいが法」とし、ra 推量形が ga のとりたての形と呼応してあらわれる形式であることをつぎのように記述する。

ことがらを断定できない、うたがわしいものとして述べる活用形である。この形は助詞 (あるいは接尾辞) -ga (うたがわしい部分につける) と呼応して用いられるのが普通である。

また、国立国語研究所 (1963) は、つぎのように記述している。

疑わしさを表わす文に用いて、文の疑わしい部分に付く。あとを推量の形 (a で終わる) で結ぶ。

鈴木 (1962) も国研 (1963) も =ga が文の疑わしい部分につき、それに呼応して ra 推量形があらわれるという点で一致している。それは仲宗根政善 (1983) でもほぼおなじであるし、野原三義 (1986:p.80) でも「活用する語や接尾辞の -ra 形と呼応する。いわゆる係結びである」と記している²⁹⁾。島袋幸子 (1990) は、ra 推量形を「うたがいの形」とし、「話し手の判断が疑わしいものとして述べたときに用いられる。この形は強調断定 (=ドウむすび形) と同様に、かかりむすびの用法で使われ、くつきの kusei と ga のついた部分をもつ文の終わりに用いられる」と記している。津波古敏子 (1990) も同様に「うたがいの形」としている。

ra 推量形を国研 (1963) は「推量の形」、仲宗根 (1983) は「ga の結び」、野原 (1986) は「ra 形」、島袋幸子 (1990) と津波古敏子 (1990) が「うたが

いの形」と名づけていて、それぞれの名称はことなるが、いずれも ga のとりたての形と呼応してあらわれることを記している。

3.1. =ga とたずねる文と ra 推量形

疑問詞たずね文の疑問詞を ga のとりたての形にし、いいおわりの述語を ra 推量形でむすぶと、話し手の判断の不確かさをあらわした うたがいたずねの文になり、出来事がいつ、どこで、なぜ生じたのか、動作の主体は誰、あるいは何なのか、あるいは動作の客体は誰、あるいは何なのか、話し手が疑問におもっていることがさしだされる。このとき、かならずしも聞き手に答えを要求しないという意味でたずねる文とはいえない。ただし、さしだされた疑問について聞き手から答えがかえってくることはある。

- 67) ^ʔt3att3a:ja k'uruma nut'uiſiga, da: t3i=ga ?it3ura.
(父は 車に 乗っているが、どこに 行くのだろう。)
- 68) ^ʔt3att3a:ja mi:ranſiga, da: ni=ga 'uira.
(父は (姿が) 見えないが、どこに いるのだろう。)
- 69) ^ʔnu:=ga nudara. t3u:t3ei mafi natt'ut'an.
(何を 飲んだのか。たちまち よく なっていた。)
- 70) ^ʔtiga:mija taru-ga=ga hat3ura. p'app'a:ga=ga hat3ura.
(手紙は 誰が 書くのだろう。祖母が 書くのだろうか。)

いいおわりの述語に ra 推量形をもつ文において文の部分を ga のとりたての形にすると、話し手自身の不確かな、うたがわしいとかんがえることがらに対する認識をいいあらわす たずねる文になる。話し手がはっきりと確認できず、疑問におもっていることがらをさししめす文の部分を ga のとりたての形にする。このばあいも、かならずしも聞き手を必要としないか、あるいは、聞き手に答えをもとめておらず、話し手自身の不確かな認識が表明されていて、本来のたずねる文ではなく、ものごと文的文的であるといえるだろう²⁹⁾。

- 71) ^uʃinʃi:ja ko:hi:=ga numira. tʃa:=ga numira.
 (先生は コーヒーを 飲むのだろうか。 お茶を 飲むのだろうか?)
 nu: suk'o:re: ʃimigaja:
 何を 準備すれば いいんだろう。)
- 72) ^utiga:mija taru-ga=ga hatzura. p'app'a:-ga=ga
 (手紙は 誰が 書くのだろう。 祖母が
hatzura. waharanu.
書くのだろうか。 わからない。)
- 73) ^utiga:mija p'upp'u:-ga=ga hatzura. p'app'a:-ga=ga
 (手紙は 祖父が 書くのだろうか。 祖母が
hatzura.
書くのだろうか。)
- 74) ^u?arija sak'i=ga nudaira. tʃiranu ?ak'ase:ʃiga.
 (あいつは 酒を 飲んでいるのか。 顔が 赤いんだが。)

おしはかりのたずねる文(肯否たずね文でも疑問詞たずね文でも)の文の部分を ga のとりたての形にすると、ga のとりたての形がさしだすことがらに焦点をあて、話し手自身の不確かな、うたがわしいとかんがえることがらに対する認識をさしだす文になる。ga のとりたての形がおしはかり文にあらわれることから、ra 推量形と呼応しているようにもみえるのだが、ra 推量形は、ga のとりたての形とのみ共存してあらわれるわけではないので、両者がかかりむすびの関係にあるとはいえないのではなからうか。

4. とりたてのくつつき =kuse:

kuse: のとりたての形は、おしはかり文にあらわれるが、いいきり文にはあらわれにくい、もしくはあらわれない。仲宗根政善(1983)ではkuse: のとりたての形の意味やはたらきを明確に規定していないが、kuse: のとりたての形とそれと呼応する述語の現代日本語訳は、すべて「～にちがいない」あるいは

は「～だろう」であり、=kuse: がおしはかり文に使用されるものであることを示唆している。

話し手の想像や思考といった間接的な認識をあらわすおしはかり文の述語形式として謝名方言には padzi 推量形と ra 推量形があり、安慶名方言には hadzi 推量形と ra 推量形がある。

謝名方言のばあい、padzi 推量形を述語にもつ おしはかり文の部分を du のとりたての形にし、その文の部分をとりたてることはできるが、kuse: のとりたての形にしてとりたてることはできない。いっぽう、ra 推量形を述語にもつ文の部分をkuse: のとりたての形にすることはできるが、du のとりたての形にすることはできない。

謝名方言のばあい、当該の文の部分をkuse: のとりたての形にすると、述語になる動詞（形容詞、述語名詞も）は、形態論的に形づけられた推量の専用形式の ra 推量形になる³⁰。

- 75) ^ʔunu sak'ija ʃinʃi:ga=kuse: numi:ra.
(その 酒は 先生が 飲むのだろう。(飲むのは先生なんだろう))
- 76) ^ʔari-ga=kuse: hattzara.
(あいつが 書いたのだろう (書いたのはあいつだろう。))
- 77) ^ʔp'upp'u:ja nengadzo:=kuse: hatzura.
(祖父は 年賀状を 書くだらう (祖父が書くのは年賀状だろう。))
- 78) ^ʔp'app'a:ja naha-tzi=kuse: ʔidza:ra.
(祖母は 那覇に 行ったのだろう (祖母が行ったのは那覇だろう。))
- 79) ^ʔkinu:=kuse: nuda:ra.
(昨日 飲んだだろう (飲んだのは昨日だろう。))

=kuse: は、他のとりたてのくつつきと同様、名詞について主語や補語、状況語などをとりたてることも、述語になる動詞や形容詞をとりたてることもできる。

80) ^h?ma:ni: ?utzuk'iba tui=kuse: su:ra.

(そこに 置いておけば とるだろう。)

81) ^h?anu jama:ja tak'asa=kuse: ?aira.

(あの 山は 高いだろう。)

kuse: のとりたての形の文の部分がとりたてられた おしはかりをあらわす。

kuse: のとりたての形が padzi 推量形と呼応せず、ra 推量形とのみ呼応するので、かかりむすびに似た現象をみせるのだが、これまでみてきたように、ra 推量形は ga のとりたての形によってとりたてられた文の述語にも、とりたてのくつつきのない文の述語にもなるので、=kuse: と ra 推量形がかかりむすびの関係をつくっているとはいえないだろう。

5. 今後の課題

とりたてのくつつきの =du と =ga と =kuse: は、それぞれが特定の述語形式によってあらわされるセンテンスタイプのなかにあられて、それがついた文の部分のさしめしていることがらをとりたてながら、はなしの対象をめぐる聞き手との関係のなかで話し手の立場からさしだされる特定のモダリティーの表現に参加しているのであろう。

文法的なカテゴリーとしての とりたてが「そこに表現されているものごとが、現実にある同類のものごとに対してどのような関係にあるかを話し手のたちばからあらわしわかる」ものだという規定から出発するなら、とりたてのくつつき =du、=ga、=kuse: をつけた文の部分の解明には、それをふくむ文だけでなく、その文にあらわされている出来事とそれをとりまく現実との関係をその文が配置されている文脈や場面のなかでとらえることが必要であろう。しかし、今回の報告は、du、ga、kuse: のとりたて形を有する文を文脈や場面に位置づけてとらえることが十分ではなかった。

du、ga、kuse: のとりたて形と呼応する述語形式の文法的な意味をあきらかにすることも不可欠であるが、その解明もおくれている。たとえば、謝名方

言の du のとりたて形と呼応する padzi 推量形と、kuse: のとりたて形と呼応する ra 推量形の文法的な意味と、それが表現するおしはかり文の意味とをあきらかにしなければ、kuse: のとりたて形の文の部分の意味も解明できないのだが、今回は padzi 推量形と ra 推量形の異同について言及できなかった。

謝名方言の ra 推量形と padzi 推量形の前の部分が同音であることから、padzi 推量形の numira padzi や nudara padzi も推量をあらわす形に padzi が後続しているとかんがえられる。国研(1963)も首里方言の hadzi 推量形がふるくは numura や nudara であったことをのべていて、安慶名方言の padzi 推量形もかつては、numura や nudara だったとかんがえられる。そうだと仮定して、安慶名方言には numura hadzi と numuru hadzi の二つの形式が並存していて、numuru hadzi に統一されたのか、numura hadzi が numuru hadzi にかわったか現段階では不明である。

ra推量形は語尾に -a をふくみ、謝名方言の padzi 推量形も検定教科書文法の「未然形」が形式名詞 padzi にかかっているようにみえる。かつては、語末 -a のうしろに *mu、あるいは、それに準ずる形式が存在していたのではないかとかんがえる。語尾 * -amu は、古代日本語のいわゆる「推量の助動詞」に相当するもので、語尾 * -amu は、推量をあらわす形だけでなく、完成相の勧誘形 num-a: (飲もう)、hak-a: (書こう)、uir-a (居よう) にもついていたとかんがえる。継続相のばあい、ra 推量形の nudura (のんでいるだろう) が継続相の勧誘形 nudura (飲んでいよう) と同音形式になっていることもそれをうらづける。古代日本語の推量や意志をあらわす形の語末の -mu と同じものが謝名方言や安慶名方言にもあり、それがすりきれたのではなかろうか³¹⁾。これらの詳細な検討もわれわれにのこされた課題である。

付記

本論文は2006年度沖縄言語研究センター研究発表会(於:沖縄大学、2006年7月6日)で発表したものに手をくわえたものである。また、本論文は「琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究」(平成16年度~平成19年度科研基盤研究(B)研究代表者:沖縄大学助教授・高江洲頼子)、および

「方言における述語構造の類型論的研究」(平成15年度～17年度科研基盤研究(B) 研究代表者:大阪大学大学院教授・工藤真由美)の研究成果の一部である。

【注】

-
- ¹ 島袋(狩俣)幸子(琉球大学非常勤講師)
 - ² 謝名方言の資料は島袋(1955年生)の内省で得られたものを、安慶名方言の資料はかりまた(1954年生)の内省で得られたものを中心にするが、それぞれ現地での隣地調査によって確認している。
 - ³ 安慶名方言のばあい、=bike:N。
 - ⁴ 安慶名方言のばあい、=t30:N。
 - ⁵ 鈴木重幸(1972)によると、現代日本語のとりたてのくつつきは「第一種のとりたてのくつつき」と「第二種のとりたてのくつつき」にわかれる。「は、も、こそ、さえ、でも、しか」が第一種のとりたてであり、「だけ、ばかり、など」が第二種のとりたてである。第二種のとりたてのくつつきは、「はだかの名詞(語幹)にじかにくつついて、名詞と第二種のとりたてのくつつき全体が一つのはだかの名詞(語幹)と同様に、そのあとに格のくつつき(連体的なものもふくむ)、第一種のとりたてのくつつき、むすびのくつつき「だ」「です」が自由につく」のであるが、安慶名方言の=bike:N、謝名方言の=bike:も同様のことがいえそうである。しかし、第二種のとりたてのくつつきのふるまいが現代日本語とどの程度かさなり、どの程度ことなるのかについては、今後の詳細な調査が必要である。
 - ⁶ 本部町備瀬、具志堅の2集落は、今帰仁村に隣接していて、両集落の方言も今帰仁方言と共通の特徴がおおく、=kuse:もあるようだ。
 - ⁷ 安慶名方言はドゥむすび形が連体形と同音形式であるが、謝名方言の連体形は語末が-nuになり、ドゥむすび形と連体形は形がことなる。謝名方言は、直説法・いいきりの形、ドゥむすび形、連体形のみつつの形がことなる。これは、謝名方言をふくむ今帰仁村方言の特徴である。

	一般むすび	ドウむすび形	連体形 (非過去)
安慶名方言	num-un	num-uru	num-uru
謝名方言	num-in	num-i:ru	num-i:nu

- ⁸ 連体修飾語を とりたてのくつつきでとりたててすることはできない。したがって、とりたてのくつつき とくみあわさるのは、-nkai, -si, -kara, -madi, -tu などの連用的な格、および連用的な格として使用される -ga, -nu にかざられる。-ga, -nu などが連体修飾語になるばあいは、とりたてのくつつき とくみあわさらない。
- ⁹ とりたてのくつつきのついていない形も他のとりたての形（とりたてのくつつき のついた形）との対立のなかで、とりたての形とみることが可能である。とりたてのくつつき のついていない形を指定のとりたてとよぶ。
- ¹⁰ はだか格の名詞、および格のくつつきにとりたてのくつつき =ja がつくとき、謝名方言のばあい、音声的な融合はなく、膠着的につくのに対して、安慶名方言では末尾の母音と音声的に融合する。
- hani (羽) hane: (羽は)、jamamadi (山まで) jamamade: (山までは)
tui (鳥) tue: (鳥は)、jamankai (山に) jamankae: (山には)
jama (山) jama: (山は)、jamakara (山から) jamakara: (山からは)
mu:ku (婿) mu:ko: (婿は)、mu:kutu (婿と) mu:kuto: (婿とは)
- ¹¹ 安慶名方言、謝名方言ともに =ja (は) と =N (も) は、主語をあらわす格のくつつき -ga, -nu にもつくことができる。この点は標準語とはことなる。
- ¹² 継続相をあらわす動詞の形をとりたて形にするには、動詞の第二中止形にとりたてのくつつきをつけ、補助動詞 un をくみあわせた分析的な形にする。また、客体の変化結果や痕跡、痕跡に基づく推論などをあらわすパーフェクト相をあらわす動詞の形をとりたて形にするには動詞の第二中止形にとりたてのくつつきをつけ、補助動詞 ?aN をくみあわせた分析的な形にする。
- ¹³ 安慶名方言のばあい、ja のとりたて形は、名詞のばあいと同様に連用形の語末の母音と融合する。
- ¹⁴ ne:N (ない) のとりたて形は、?aN (有る) を補助動詞としている点で形容詞にちかい。「無くはない」「無くもない」のように「ない」を補助動詞に

している現代日本語とはことなり、安慶名方言、謝名方言の *ne:n* が動詞にちかい面をみせる。

- ¹⁵ 「話し文では、おおくのばあい、「だろう」をともなうおしはかりの文はもとの意味におけるおしはかりの文であることをやめて、念おし的なたずねる文へ移行している。はなしあいの構造のなかでは、このおしはかりの文は念おし的なたずねる文へかんたんに移行するのである。ひとりがおしはかり的な想像なり判断をおこなうとすれば、あい手がわからその真偽がこたえになって、かえってくるのは、当然なことである。」
- ¹⁶ 謝名方言の *padzi* 推量形は、*ra* 推量形に形式名詞 *padzi* をくみあわせてつくる総合的な形であり、安慶名方言の *hadzi* 推量形は、連体形に形式名詞 *hadzi* をくみあわせてつくる分析的な形である。
- ¹⁷ 安慶名方言の例ははかりまたの内省に、謝名方言の例は島袋の内省によるものである。安慶名方言の例文には先頭に *A.* の記号をつけ、謝名方言の例文には *J.* の記号をつける。用例の表記は簡略的な音声記号を使用する。
- ¹⁸ 文の分類については奥田靖雄 (1985) にしたがう。
- ¹⁹ あわせ文 (複文) における「かかりむすび」については稿をあらためる。
- ²⁰ =*du* をさかんに使用しながらドゥむすび形のような特定の形式をもたない (かかりむすびのみられない) 宮古諸方言のような方言もあって、それらをふくめて、かかりむすびとは何かをかんがえていかなければならない。
- ²¹ =*du* は、古代日本語の「ぞ」に対応するもので、いいおわりの述語の専用形式があること、その形式が連体形と同音形式になることなど、古代日本語のばあいと似る。ただし、今帰仁方言のばあい、動詞や形容詞の連体形は、ドゥむすび形と同じ形にはならない。接続する語の語末のフォネームによっては異形態「=*ru*」もある。
- ²² これまで =*sa* を終助辞とみてきたが、=*sa* をとりさった述語の形は単独では使用されないので、=*sa* は終助辞ではなく、活用形の語尾の一部であり、=*sa* のついた形が形態論的な形であるとみるべきであろう。numusa, nudasa などの語形を動詞の活用形に位置づけ、その形態論的な意味について明らかにすることが必要であろう。

- ²³ ドウむすび形を述語にもつ文が終助詞をともなわないで、ドウむすび形でいいきりということは、ドウむすび形を述語にもつ文がすでに固有の通達的な意味をあらわしていて、新たな通達的な意味を付けくわえる必要がないからなのであろう。

終助詞とは「話しあいのなかでの文のおしまいに配置されていて、その文の、場面のなかでののはたらきを表現している。正確に言えば、話しあいの場面が、なによりもまず、a) 話し手、b) 聞き手、c) 話しの対象から構成されていて、それらのあいだにさまざまな関係がなりたっているとすれば、これらの終助詞（「ね、さ、よ」著者による補ぎない）は、そのさまざまな関係を表現しているのである。これらの終助詞は、話しの対象をめぐる、話し手と聞き手との関係のありかたを表現している。その関係のあり方は、まちがいなく、対象をめぐる通達と認識にかかわっている」と井上拓子（2001）は定義している。

- ²⁴ 予定されていた出来事をあらわす「スル（シタ）はず」に対応する意味をあらわすばあい、コピュラ（繋詞）のjan（だ）/jatan（だった）をともなうことがおおい。
- ²⁵ num-imi（飲むか）、nud-i:（飲んだか）など接辞-iのついた専用形式のほかに直説法いいきりの一般むすびの形に終助辞=na:をつけた形を肯否たずね文の述語にすることができる。
- ²⁶ 疑問詞たずね形は、疑問詞をふくむたずね文において疑問詞と呼応してあらわれるので、これも「かかりむすび」にふくまれるものであろう。
- ²⁷ 接辞-iは、肯否たずね形の num-imi（飲むか）、nud-i:（飲んだか）にもふくまれている。
- ²⁸ 野原三義（1986）は、「caa suga（どうするか）、nuunci warabi nakeesuga（どうして子供泣かすか）、maakai ?icuga（どこへ行くか）」など、文末の活用語にあらわれる =ga もとりたてのくつつきとみている。かりまた・島袋（2006）は、-ga は動詞や形容詞などの活用語の語尾の一部であり、野原（1986）の「suga, nakeesuga, ?icuga」は、疑問詞たずね文の専用の述語形式「疑問詞たずね形」であると考えている。国研（1963）や仲宗根（1983）

は、これを終助詞とみている。野原三義・内間直仁（2006）は、品詞名をあげていないが、とりたてのくつつきの形と終助辞の形を別見出しにしている、両者をわけている。

- ²⁹ 話し手が推量した創造なり判断のただしさなりを聞き手にといたです、念おし的なたずねる文の述語には ra 推量形が使用される。このばあい、終助辞=ja:をつけることが義務的である。このばあい、ra 推量形は、=ga とも =du とも呼応していない。

⁴ʃinʃi:ja na: su:ra=ja:ʔ (先生はもう 来るだろう?)

⁴p'upp'u:ja kusui nudara=ja:ʔ (おじいさんは 薬を飲んだらう?)

⁴ʔja:N madʒun ʔitʃura=ja:ʔ (君も一緒に 行くだらう?)

- ³⁰ ra 推量形の第2過去形は使用しにくい。それがなぜなのか、もし使用できるとすればどういう条件のもとで使用されるのか、用例をふやしながら検討したい。
- ³¹ 聞き手に動作の実現をもとめるさそいかける形の語尾は、現在では-aだが、かつては、その後に接辞の*-muがあったと考えられる。与論方言では勸誘形がkakan（書こう）、juman（読もう）などのように、語尾に-Nがふくまれている。与論方言のさそいかける形の語尾にふくまれるNは、かつて*-muだったもので、沖縄方言ではすりきれたのである。

【参考文献】

- 井上拓子（2001a）「終助詞－「ね」と「よ」－」『教育国語』4-2、4-27、東京：むぎ書房
- 井上拓子（2001b）「終助詞「さ」」『ことばの科学』11、88-110、東京：むぎ書房
- 上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』58-86
- 上村幸雄（1992）「琉球列島の言語・総説」『言語学大辞典第3巻』829-848、東京：三省堂
- 内間直仁・野原三義編著（2006）『沖縄語辞典－那覇方言を中心に－』東京：研究社
- 国立国語研究所『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

- 野原三義 (1986) 『琉球方言助詞の研究』 武蔵野書院
- 奥田靖雄 (1997) 「動詞 (その1) ・その一般的な特徴づけ」 『教育国語』 2-25、
東京：むぎ書房
- 奥田靖雄 (1996) 「文のこと・その分類をめぐって」 『教育国語』 2-22、2-14、
同上
- 奥田靖雄 (1985a) 「おしはかり (2)」 『日本語学』 4巻2号、48-62、東京：
明治書院
- 奥田靖雄 (1984) 「おしはかり (1)」 『日本語学』 3巻12号、54-69、同上
- 奥田靖雄 (1985b) 「文のこと・文のさまざま」 『教育国語』 80、41-49、同上
- かりまたしげひさ (2004) 「沖縄方言の動詞のアスペクト・テンス・ムードー
沖縄県具志川市安慶名方言のばあいー」 『日本語ののアスペクト・テンス・
ムード体系ー標準語研究を超えてー』 220-265、東京：ひつじ書房
- 狩俣繁久・島袋幸子 (1989) 「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリーーアス
ペクトとヴォイスー」 『ことばの科学2』 135-157、東京：むぎ書房
- 古座暁子 (1984) 「たずねる文」 『教育国語』 79、2-13、同上
- 近藤泰弘 (2003) 「とりたての体系の歴史的変化」 『日本語のとりたてー現代語
と歴史的変化・地理的変異』 (沼田善子・野田尚史編)、243-256、くろしお
出版、東京
- 佐藤里美 (2006) 「名詞述語たずね文ーNか・Nですか」 言語学研究会発表レジ
メ (未公刊)
- 島袋幸子 (1992) 「沖縄北部方言」 『言語学大辞典第3巻下巻』 814-829、東京：
三省堂
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 東京：むぎ書房
- 鈴木重幸 (1960) 「首里方言・動詞のいいきりの形」 『国語学41号』
- 津波古敏子 (1992) 「沖縄中南部方言」 『言語学大辞典第3巻下巻』 829-848、
同上
- 沼田善子 (2003) 「現代語のとりたての体系」 『日本語のとりたてー現代語と歴
史的変化・地理的変異』 (沼田善子・野田尚史編)、225-241、同上
- 半藤英明 (2003) 『係助詞と係結びの本質』 新典社